口頭発表Ａ④

若手教員を対象とした授業改善支援プログラムの効果と課題
―徳島大学全学ＦＤ推進プログラムを事例として―

香川　順子
（徳島大学大学開放実践センター）

１．研究背景と目的

2008年度よりＦＤ（Faculty Development）の義務化がなされ、「学士課程教育の構築に向けて（中教審答申2008年12月24日）」において、教員の教育力を向上するためのＦＤの実質化や組織化が課題として挙げられた。徳島大学では、2002年度の比較的早期から全学ＦＤ推進プログラム（以下全学ＦＤ）を毎年実施し、現在第4期の2年目にあたる（3年間を1期とする）。ＦＤ専門委員会、学部ＦＤ委員会との連携を強め、組織的な整備を行うと共に、全学ＦＤ推進プログラムを継続して行ってきた。

その中でも若手教員に対する支援として「教育力開発基礎プログラム」と「授業コンサルテーション・授業研究会」を提供している。若手教員は、個人の授業の在り方が形作られる重要な時期にあたり、この時期に自身の教育活動を効果的に振り返る機会があれば、実質的な教育改善がより促進されると思われる。これらの2つのプログラムを、本稿では「授業改善支援プログラム」とし、個々の教員が、授業に関連する自らの活動を振り返ることを通して、自身の課題を認識し、その解決を促すことを重視するものとする。

本研究では、徳島大学における全学ＦＤ推進プログラムのうち、特に若手教員を対象とした授業改善支援プログラムとして「教育力開発基礎プログラム」「授業コンサルテーション・授業研究会」を取り上げ、その接続の意味を考察することを目的とする。

２．授業改善支援プログラムの概要

実践的・体系的ＦＤとして第1期（2002年度～2004年度）より実施されてきたプログラム（森2004）は、第4期（2011年度～）において体系性をより強化したものとして実施するに至っている。その要点を次に示す。紙面の都合上、各プログラムの詳細については「全学FD推進プログラムの実施報告」（日置ら2012）を参照頂きたい。

（１）教育力開発基礎プログラム

主に若手教員を対象に、基礎的な教授法を身につけるため、シラバス作成や授業計画など教育に関する基礎知識の理解と、模擬授業・授業検討会の実施など実践的な教育力向上のための活動を、レクチャーやワークショップを通して行っている。実践的な教育力の向上と、日常的な教育改善活動を推進するための入口として研修を位置づけ、教員の相互交流を重視しつつ、様々な課題・問題解決を行う場として設定している。

（２）授業コンサルテーション・授業研究会

「教育力開発基礎プログラム」を修了した教員を主な対象者とし、教育改善のためのコンサルティングを実施している。コンサルタントによる授業参観の後、ＦＤリーダーを含めて様々な部局から参加者を交え、授業研究会を開催している。この研究会での議論を含め、個々の教員の授業改善を支援するための一連のプロセスを、徳島大学独自の授業コンサルテーションとして提供している。このプログラムは、教員の実情（ニーズ）に沿った実践的、日常的な FD を重視し、具体的な支援を行うものである。

３．プログラムの効果と課題の把握

先に挙げたプログラムは、個々のプログラムとしてはいくつか効果がすでに明らかにされている（田中ら2010、2011）。しかし、教員の成長に応じた継続的支援という視点から見れば、十分な支援には至っていなかった。教員としての教育理念や方法が形作られる若手教員の時期には、不安

や悩みも抱きやすく、個々のニーズに応じた実践的・日常的な支援と合わせて、教員の成長過程に合わせた支援を継続的に行う仕組みが必要である。そこで第4期より、「教育力開発基礎プログラム」のさらなる改善を進め、「授業コンサルテーション・授業研究会」との接続をより強化し、各学部・部局のＦＤリーダーがスタッフとして模擬授業・授業検討会へ本格的に関わることとなった。さらに2012年からは、授業コンサルテーションへの接続を強めるため、大学開放実践センターの教員がコンサルタントの役割を持って関わる事に加え、映像を用いた授業検討会を実施した。

第４期以降の「教育力開発基礎プログラム」については、2011 年度、2012 年度に実施したアンケートの「受講して良かったと思われる点」と、2012 年度の模擬授業・授業検討会に関する事後調査アンケートの「模擬授業・授業検討会により、自分の授業について気づきがあった」「模擬授業・授業検討会により、ご自身の授業を改善しようと思われた事」といった項目から効果について考察した。後者のアンケートは、研修をきっかけとして何に気づき、その後の授業改善活動の実行可能性について聞いたものである。この点については、森（2004）が実践的ＦＤ活動について「実践的とは個々の教員が自ら体験し、実行可能な実践を進めることができること」と述べており、体験によって、何に気づき、何を実行しようとしているか（あるいはしたか）という視点から効果検証を行うことがまず必要であると考えた。

これらのアンケート結果より、他教員との交流から、多くの教員が具体的な気づきを得て、改善の契機を得ていること、また自身の活動を客観的にふり返る活動が重要な気づきを生み出していることなどが明らかとなった。この傾向は、授業コンサルテーションの効果とも共通しており、コンサルタントとＦＤリーダーが連携しながら授業検討会が行われたことも影響していると考えられる。また、模擬授業に続いて、実際の授業で実践しながら授業改善を重ねていく一連のプロセスは、教員の成長を継続的に支援するものとして相乗的な効果が期待される。今後は、個々の教員にとって「重要な他者」と関わりながら、日常的な授業活動を振り返り、気づきを促すと共に、実践的な授業改善活動へつなげるための支援体制をより充実させる必要がある。

４．今後の課題

2011 年度より「ティーチング・ポートフォリオ」を作成するためのワークショップが開催され、教員個人のニーズに応じて、教育活動の振り返りを行うための場を提供した．現段階では、全学ＦＤとして実施していないが、実質的な授業改善の支援として今後定期的な実施が期待される。特に、若手教員の段階から、他教員と共に自身の教育理念を明確化し、日常の教育活動を振り返ってまとめ、改善へつなげていくための活動は、貴重な経験となるであろう。今後は、「教育力開発基礎プログラム」「授業コンサルテーション・授業研究会」「ティーチング・ポートフォリオ作成ワークショップ」の体系的な支援を提供し、教員個々の日常的教育改善活動のサイクルを支援しつつ、主体的な活動を促進していくことが課題である。

参考文献

1. 日置善郎・宮田政徳・川野卓二・香川順子・吉田博・奈良理恵（2012）「2011 年度徳島大学全学ＦＤ推進プログラムの実施報告」大学教育研究ジャーナル，9:152-171
2. 森和夫（2004）「大学教育の改善をめざした実践的・体系的ＦＤ活動の方向」大学教育研究ジャーナル，1:30-44
3. 田中さやか・香川順子・神藤貴昭・川野卓二（2010）「大学教員初任者研修における参加者の意識変容に関する一考察―シラバス作成・模擬授業を取り入れた研修を通して―」日本教育工学会大会講演論文集，26:435-436
4. 田中さやか・香川順子・神藤貴昭・川野卓二（2011）「授業コンサルテーションにおけるコンサルティにもたらされる有効性の検討」第 17 回大学教育研究フォーラム発表論文集，77-78